認知症看護認定看護師教育課程における教育と授業評価の分析

高田　由美[1)]　　尾岸恵三子[2)]　　藤井　博英[1)]　　高橋ゆかり[3)]

Practice and evaluation of a regular curriculum for certified nurse in dementia nursing

Yumi TAKADA[1)], Emiko OGISHI[2)], Hirohide FUJII[1)], Yukari TAKAHASHI[3)]

要旨：認定看護師教育課程 認知症看護認定看護師コース（以下、本教育課程）の教育実践を振り返り、今後の課題を検討した。今回、授業評価を実施した研修生20名の認知症看護経験年数は平均10.4±4.45年であり、本教育課程を受講した理由の大半は自己の学習ニーズ（16名）であった。

研修生の本教育課程に対する期待には「臨床実践に沿った講義内容」があり、修了生による臨床に即した実践内容を含んだ授業の工夫が必要であると考えられた。研修生は「認知症ケアを自己の言語で伝えられるようになりたい」という目標を持つ者が多く、本教育課程で看護過程の展開技術を重視した学習プログラムはニーズに一致していた。

研修生は自己の目標達成において病院実習の有効性を高く評価していたが、満足度は低い傾向を示した。特に、受講理由が施設長等の勧めである研修生にその傾向が認められた。よって、入学前に研修生が自己を振り返る課題を課し、本教育課程での学びのイメージを高めさせ、認定看護師の研修の質の向上を図ることが課題に挙げられた。

キーワード：認知症看護認定看護師、教育実践、授業評価

Abstract：The purpose of the research was to look back upon the educational practice of the course for certified nurses in dementia nursing of the curriculum for of certified nurse education, (hereafter referred as to “this education course”) and discuss tasks for future use. The average number of years of experience in dementia nursing for the 20 trainees of whom the class evaluation of this education course was implemented was 10.4±4.45, and the reason for attending this educational course was for the majority, a fulfillment of their own learning requirements (16 trainees).

Their expectations for this educational course included the “contents of lectures consistent with clinical practice.” Therefore, it was considered necessary to contrive the class in line with the clinical practice of those who have already completed this educational course. There were many trainees who had the target of “conveying dementia care in their own words,” which showed that a learning program with emphasis on developing technology for the nursing process matched their needs.

Although the trainees highly evaluated the effectiveness of hospital practice for their target achievement, they showed a low degree of satisfaction. This trend was significant among those who attended this educational course at the encouragement of the chief of their facility, in particular. Therefore, the benefit of indicating the tasks before they attend this educational course, in order to make them reflect on themselves, enhance their image of learning in this educational course. Improving the quality of training for qualified nurses was also clarified.

Key words：certified nurse in dementia nursing, educational practice, class evaluation

---

1）日本赤十字秋田看護大学　2）日本食看護研究会　3）秋田県立脳血管研究センター

1）Japanese Red Cross Akita College of Nursing　2）Japanese Society of Nursing and Human Nutrition

3）Reserch Institute for Brain and Blood Vessels-Akita

Ⅰ．はじめに

2006年度に「認知症看護」が認定看護師制度の特定看護分野となって以来、現在は本学を含め全国で９箇所の教育機関で認定看護師を育成している。2015年の時点で、日本看護協会への認知症看護認定看護師の登録者数は、全国で653名でありそのうち東北全体は53名（8.1％）が登録されている。本学の教育課程を修了した認定看護師は31名である。

日本赤十字秋田看護大学では、地域の要望に応え、2013年度から看護職の生涯学習の一環として、６ヶ月間の認定看護師教育課程、認知症看護認定看護師コース（以下､本教育課程）を開講し、現在は３期生20名が学んでいる。認定看護師の研修期間は６ヶ月から１年と定められており、本学では８月から翌年の１月までの半年間を研修期間としている。研修生は、臨床経験５年以上、そのうち専門分野の臨床経験が３年以上と定められている。しかし、研修生の背景は様々であることから、研修開始時の能力は同等ではない（筑後ら，2009）。そのため、教育的配慮や工夫を必要とされるが、開講年度以降は専任教員の入れ替わりもあり、充分な検討がされていない現状である。

そこで､本教育課程の研修生の授業評価を基に、教育機関としての実践経過を振り返り、今後の課題についてまとめたので報告する。

Ⅱ．目　的

本教育課程の教育実践を振り返り、今後の課題を明らかにする。

Ⅲ．授業評価の調査概要

１．調査対象

2014年度の本教育課程を受講した研修生21名である。

２．調査方法

調査期間は、認定教育課程における全ての成績評価が終了した2015年１月23日から１月31日に行った。調査用紙は、学内演習であるケーススタディの提出日に１名を除く研修生全員へ手渡しで配付した。事前にケーススタディを提出し、登校する予定がない研修生１名についてはメールにて調査用紙のファイルを送信した。調査用紙は、記入後に所定のボックスに提出してもらった。なお、研修生には本教育課程の授業評価であり、各自の成績には一切関係ないことを口頭と文書にて伝えた。

３．調査内容（図１．参照）

１）対象者の属性

年齢は、１.30歳未満、２.30～39歳、３.40～49歳、４.50歳～59歳の各範囲から、該当する箇所に印をつけるように依頼した。臨床経験については、本教育課程の受講前に所属する部署、臨床経験年数及び認知症看護経験年数を質問した。本教育課程の受講理由については自由記載とした。

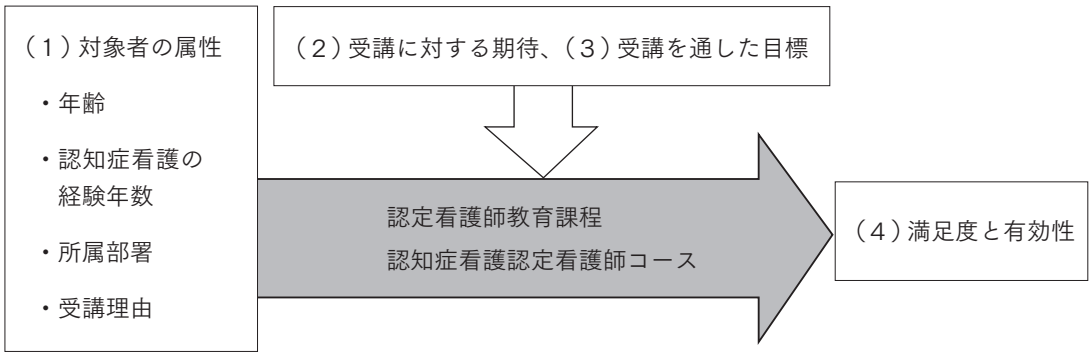

図１　授業評価の枠組み

2）本教育課程の受講への期待する内容

本教育課程に対する期待については、「本教育課程の受講を受けるにあたって、あなたはどのようなことを期待していましたか。具体的にお書きください」と自由記載による回答を求めた。

3）本教育課程の受講を通した自己目標の内容

本教育課程の目標設定については、「本教育課程の受講を受けるにあたって、あなたはどのような目標を設定していましたか。具体的にお書きください」と、自由記載による回答を求めた。

4）本教育課程に対する有効性と満足度

本教育課程の教育内容は、講義、病院実習、訪問看護ステーション実習（以下、訪看実習）、学内演習の４要素で構成されている。本教育課程に対する有効性については、４要素ごとに「本教育課程の受講内容は、あなたの目標を達成させるために有効なものでしたか」と、リッカート尺度４段階（1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.まあそう思う、4.そう思う）で回答を求めた。

また、本教育課程の満足度については、４要素ごとに「私は総合的に判断して授業に満足した」と、リッカート尺度４段階（1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.まあそう思う、4.そう思う）で回答を求めた。

4．分析方法

1）対象者の属性は回収されたデータを単純集計した。その際、受講理由は自由記載の内容を読み取り、「1.自己の学習ニーズ、2.施設長等の勧め」の２項目、認知症看護経験年数については「1．5～10年未満、2.10年間以上」の２項目へ変換し、単純集計を行った。

2）本教育課程の受講内容に対する期待と自己の目標は、自由記載した内容を質的に分類整理した。自由記載の内容は一意味単位で分類したため、のべ人数を示した。

3）対象者全体における本教育課程に対する満足度、自己の目標達成に対する有効性を単純集計した。また、受講理由別及び認知症看護経験年数別による満足度の比較をχ^2検定で比較した。

Ⅳ．結　果

調査用紙の回収数は20名（95.2％）であった。そのうち、認知症看護経験年数別による満足度の比較は欠損値のある１名を除いた19名を有効回答として、分析を行った。

1．対象者の概要（表１参照）

表１　対象者の属性

N=20

項　目		人数（％）
年　齢	30歳未満	1（ 5.0）
	30～39歳	8（40.0）
	40～49歳	8（40.0）
	50～59歳	3（15.0）
所属部署	外　来	1（ 5.0）
	病　棟	13（65.0）
	看護部	2（10.0）
	その他	4（20.0）
受講理由	自己の学習ニーズ	16（80.0）
	施設長等からの勧め	4（20.0）
臨床経験年数	16.1（SD±5.42）年[a]	
認知症看護経験年数	10.4（SD±4.45）年[b]	

a 対象者全体の平均年数の数値である
b 欠損値を除いた19名の平均年数の数値である

研修生は、30歳未満は１名、30～39歳と40～49歳が共に８名、50歳以上は３名であった。所属部署は病棟勤務13名（65.0％）が一番多かった。認知症看護経験年数は平均10.4±4.45年であった。研修生の大半は、本教育課程を受講した理由に自己の学習ニーズ（16名）を挙げていた。

2．受講に対する期待（表２）

表２　認知症看護認定看護師コースに対する研修生の期待

項　目	のべ人数
臨床実践に沿った講義内容	8
認知症に関する新しい知識・技術の習得	5
一緒に解決できる仲間づくり	3
専任教員によるサポート体制	2
無事に修了できること	1
認定看護師に必要とされる学習（論文、レポートなど）	1
自己の看護を客観視すること	1

研修生の本教育課程に対する期待は、「臨床実践に沿った講義内容」、「認知症に関する新しい知

識・技術の習得」、「一緒に解決できる仲間づくり」「専任教員によるサポート体制」の順に多かった。また、少人数の意見であるが、「無事に卒業できること」「認定看護師に必要とされる学習」「自己の看護を客観視すること」もあった。

３．本課程における自己の目標（表３）

表３　研修生の認知症看護認定看護師コースにおける自己目標

項　　目	のべ人数
認知症ケアを自己の言語で伝えられるようになりたい	5
認知症に関する知識を修得したい	5
無事修了したい	5
根拠に基づいた対応ができるようになりたい	3
スタッフ教育に生かしたい	3
将来、認定看護師として活動するための能力を身につけたい	2
急性期看護における認知症への看護実践ができるようになりたい	1
地域からも認知症の方を受け入れられるように取り組みたい	1

本教育課程における自己の目標の内容については、「認知症ケアを自己の言語で伝えられるようになりたい」「認知症に関する知識を修得したい」「無事（教育課程を）修了したい」が多かった。そのほかに、「根拠に基づいた対応ができるようになりたい」「スタッフ教育に生かしたい」「将来、認定看護師として活動できるための能力を身につけたい」「急性期看護における認知症者へ看護実践ができるようになりたい」「地域から認知症の方を受け入れられるように取り組みたい」という目標設定をしていた。

４．本教育課程に対する満足度と自己の目標達成に対する有効性（表４）

自己の目標達成に対する本教育課程の有効性を調べた結果、「そう思う」「まあそう思う」と回答した研修生が大半を占めた。特に病院実習では「そう思う」10名（50.0％）、「まあそう思う」8名（40.0％）とその有効性を高く評価していた。一方、満足度の点では、同じく病院実習では「そう思う」5名（25.0％）、「まあそう思う」11名（55.0％）となっており、有効性とは異なる結果であった。講義・訪看実習・演習では「まあそう思う」と回答した研修生が一番多くを占めた。

表４　研修生全体の本教育課程に対する満足度と自己の目標達成に対する有効性

N=20

		有効性		満足度	
		n	%	n	%
講　　義	そう思う	5	25.0	3	15.0
	まあそう思う	12	60.0	11	55.0
	あまりそう思わない	3	15.0	5	25.0
	そう思わない	0	0.0	1	5.0
病院実習	そう思う	10	50.0	5	25.0
	まあそう思う	8	40.0	11	55.0
	あまりそう思わない	1	5.0	2	10.0
	そう思わない	1	5.0	2	10.0
訪看実習	そう思う	4	20.0	5	25.0
	まあそう思う	13	65.0	11	55.0
	あまりそう思わない	3	15.0	4	20.0
	そう思わない	0	0.0	0	0.0
演　　習	そう思う	5	25.0	3	15.0
	まあそう思う	10	50.0	11	55.0
	あまりそう思わない	3	15.0	3	15.0
	そう思わない	2	10.0	3	15.0

５．受講理由別、認知症看護経験年数別の満足度比較（表５、６）

受講理由別による満足度の比較では、病院実習では有意な差を認めたが、それ以外には有意な差は認めなかった。また、認知症看護経験年数別の満足度には有意な差は認めなかった。

表５　受講理由と本教育課程に対する満足度との関連

N=20

		自己の学習ニーズ		施設長等からの勧め		*p*値
		n	%	n	%	
講　　義	そう思う	2	12.5	1	25.0	.895
	まあそう思う	9	56.3	2	50.0	
	あまりそう思わない	4	25.0	1	25.0	
	そう思わない	1	6.3	0	0.0	
病院実習	そう思う	5	31.3	0	0.0	.011＊
	まあそう思う	10	62.5	1	25.0	
	あまりそう思わない	0	0.0	2	50.0	
	そう思わない	1	6.3	1	25.0	
訪看実習	そう思う	4	25.0	1	25.0	.958
	まあそう思う	9	56.3	2	50.0	
	あまりそう思わない	3	18.8	1	25.0	
	そう思わない	0	0.0	0	0.0	
演　　習	そう思う	3	18.8	0	0.0	.533
	まあそう思う	8	50.0	3	75.0	
	あまりそう思わない	2	12.5	1	25.0	
	そう思わない	3	18.8	0	0.0	

＊：５％水準　分析方法：χ^2検定

表６　認知症看護経験年数と本教育課程に対する満足度との関連

n =19

		５年以上10年未満		10年以上		*p*値
		n	%	n	%	
講　　義	そう思う	1	14.3	2	16.7	.118
	まあそう思う	2	28.6	9	75.0	
	あまりそう思わない	3	42.9	1	8.3	
	そう思わない	1	14.3	0	0.0	
病院実習	そう思う	1	14.3	4	33.3	.813
	まあそう思う	4	57.1	6	50.0	
	あまりそう思わない	1	14.3	1	8.3	
	そう思わない	1	14.3	1	8.3	
訪看実習	そう思う	2	28.6	3	25.0	.858
	まあそう思う	4	57.1	6	50.0	
	あまりそう思わない	1	14.3	3	25.0	
	そう思わない	0	0.0	0	0.0	
演　　習	そう思う	1	14.3	2	16.7	.080
	まあそう思う	3	42.9	8	66.7	
	あまりそう思わない	0	0.0	2	16.7	
	そう思わない	3	42.9	0	0.0	

分析方法：χ^2検定

Ⅴ．考　察

１．研修生の状況

認定看護師教育課程は実務経験５年以上、特定分野３年以上が必要な要件となる。今回の研修生の臨床経験年数は16.1±5.42年で、特定分野である認知症看護経験年数も10.4±4.45年と必要要件を充分に満たした状況であった。しかし、自己の学習ニーズによって受講を決めた者ばかりではなく、経験年数の長さが学習ニーズを強くする後押しになることは考えにくい。2015年度においても、教育課程の研修生数を充足するために、東北県内の主要な病院を対象に情報広報活動を展開し、教育課程の周知を図ってきた。しかし、現時点において認知症看護認定看護師の配置数は病院施設や介護施設における診療報酬加算へ反映されていない状況が続いており、今後も各病院への情報広報活動や修了生の活動を周知するなどの工夫を行い、研修生を充足する必要があると考える。

２．受講への期待と自己目標

研修生の受講期待で一番多くを占めたのは「臨床実践に沿った講義内容」であった。今回の研修生は臨床経験年数が16年前後であり、経験豊かな成人学習であったと考える。こうした場合、教科書で習う基礎的な内容よりも、実務的なものを求めるといわれる。そのため、臨床実践に沿った講義内容、例えば既に認定看護師で活動している看護師からの講義等へ期待が大きくなるのではないかと考えられた。

また、研修生は、将来の認定看護師活動を遂行するうえで欠かせない仲間づくりも期待をしていた。認知症看護認定看護師は全国で653名（2015年データ）と他の認定看護師よりは少なく、さらに東北６県においては53名と数少ない状況である。よって、今後の活動を開始するにあたり、他施設との認定看護師との情報交換や情報共有が欠かせない。こうした観点からも、認定看護師教育課程は看護実践上での同じ悩みを共有する数少ない仲間を作る場を提供することに貢献していると考えられた。

一方、本教育課程の学習を通して「自己の看護を客観視すること」と期待する研修生も１名存在した。研修生は日頃病棟等で多忙な業務を遂行しており、なかなか自分の看護実践を俯瞰することは困難である。認定看護師教育は成人教育の一つであり、子どもに対する教育の「形を造っていく」とは異なり、「形を変えていく＝変容していく」という特徴がある（クラントン，2010）。この変容の過程では、学習者の持つ価値観や前提が行っている学習と矛盾したり、あるいは学習への制約へと働く場合もあり得る。江美ら（2014）は、認知症看護教育課程の実習で指導者等からの指摘を受け入れることは、研修生にとって「出来上がっているものを壊していく困難さ」となり、看護師としてのアイディンティティを揺るがすことを報告している。本教育課程における学習の場は臨床の業務とは一線を画した時期となり、自己の看護実践を客観視することが可能な反面、自己のアイディンティを揺るがす脅威にもなり得ると考えられる。研修生の期待にあった「認定教育課程のサポート体制」を充実し、さらに多くの研修生が自分の考えや物の見方の傾向や歪みなどに気づく良い機会となるように指導を考慮する必要が示唆された。

認知症看護認定看護師としての研修期間は常に主体的な行動を実践することを求められる。いわゆる成人学習者は自ら学習を選択し、自律的に学習を進めるといわれるため、各研修生がどのような目標設定をするかにより学習の成果へも影響してくる。研修生の回答で一番多かったのは「認知症ケアを自己の言語で伝えられるようになりたい」であった。江美ら（2014）の調査においても、研修生は一人の認知症者に関する自らのアセスメント内容を伝えられない困難さを感じていることが報告されている。本教育課程では、認知症者の全体像をアセスメントした結果を看護職へ言葉として表現できることを目標に、看護過程を展開する技術を重視した学習プログラムを組んでいる。このプログラムは研修生のニーズに一致しているだけでなく、実習中の研修生の課題を達成するためにも重要であり、今後は短期間の教育期間中にどのような方法で実施するのかを継続的に考えていくことが必要である。

研修生の期待や目標には、「無事に修了できること」という切実な内容もあった。これは実習を無事終えた段階での調査であったことから、入学時に抱いた受講に対する期待や目標とは異なる内容であったと推測される。しかし、研修生の自由記載には、「入学したら皆卒業できると思った」という意見もあった。日本看護協会の認定看護師

制度では、各教育機関へ入学時の選考要件を委ねており、他の教育機関の修了要件を含めて実態は不明である。今後、認定看護師の質の担保をするためには、研修生と教育機関の双方が確認かつ納得できる修了要件について考慮しなくてはいけない点として挙げられる。

３．本教育課程に対する有効性と満足度

本教育課程の講義・病院実習・訪看実習・演習と４つの要素に対しての有効性と満足度は概ね評価が高い結果を示した。しかし、病院実習に関しては得点の分布が異なり、自己の目標達成をするうえでの有効性は「そう思う」10名に対し、満足度は「そう思う」５名であった。また、本教育課程を受講する理由が病院の勧めであった研修生においても、病院実習の満足度は高くなかった。今回、授業評価には各評点に対する理由についての詳細は明らかではないが、次のような要因が考えられる。

病院実習については、本学の所在する秋田県内では学生数に適した施設が充足していない状況であったため、遠隔地での病院施設で行った研修生も多かった。病院実習の５週間の間に心理的なサポートを要する研修生も存在したと推察するが、遠隔地での実習では電子メールや電話による専任教員の相談対応となり、その点は直接話を聴きたいというニーズにタイムリーに介入ができないという限界がある。また、研修生の中には同居している扶養家族（介護を要する家族､養育する子供）もいるが、遠隔地の実習では扶養家族と離れて暮らすことを余儀なくされる。こうしたことに不安を抱きつつ、一方では自らの実習目標も達成しなくてはいけないという内的葛藤が生じることが推察された。これらの要因から、病院実習は自己の目標達成への有効性を感じつつも、実習先の場所によっては総合的な満足度が低くなる部分もあるのではないかと考えられる。

本教育課程では、募集要項に実習施設一覧を掲示しており、かつ入学者選抜試験においても実習施設の希望を確約することはできない旨は十分説明し、研修生の同意を得ている。しかしながら、専任教員及び研修生の双方にとって実習施設と大学との行き来が可能である方が心理的かつ教育的なサポート体制を図るうえでは良いと考えられる。本年度は、秋田県内に本学の修了生が認定看護師としての活動を展開できるようになったため、実習施設の開拓も可能となり、この点については解決していく見込みである。

また、受講理由が病院の勧めである研修生は、病院実習よりも講義に対する満足度の方が高かった。病院実習では、講義で学んだ知識を活用し、認知症看護の視点から確かな根拠に基づく看護過程の展開技術の向上が求められる。研修生の目標にあった「認知症ケアを自己の言語で伝えられるになりたい」と自らの経験や直感が言語化できないという困難さを抱いた受講であるなら、病院実習における看護過程の重要性は充分認識できたと考える。しかし、病院からの勧めである場合、自らの看護実践に関する迷いや困難がさほど強くない可能性は否めない。その限りでは、本人の研修に対するニーズに病院実習の目的は余り適っておらず、満足度も低くなったのではないかと考える。認定看護師教育課程の研修期間は短期間でもあり、入学前に研修生が自己の看護実践を振り返る課題を課し、本教育課程での学びのイメージを高めさせ、認定看護師の研修の質の向上を図ることが課題である。

４．今後の課題

以上の授業評価から抽出された、本教育課程における今後の課題は次のようになる。

- 本教育課程の修了生を多く活用し、より臨床実践に沿った講義を展開する。
- 教育課程修了後も引き続き、研修生相互で心理的なサポートが図れるよう、認定看護師教育課程の修了生を中心としたネットワーク作りを推進する。
- 認定看護師教育課程の研修前後を通し、自己の看護を客観視できるよう考慮した指導を行う。
- 短期間の研修期間において、多くの研修生の目標である「認知症ケアを自己の言葉で伝えられるようになりたい」の達成をねらいとし、入学前も視野に入れた学習プログラムを考慮する。
- 東北圏内における実習施設の開拓を行い、実習環境を充実する。
- 入学前に研修生が自己の看護実践を振り返る課題を課し、本教育課程での学びのイメージを高めさせ、認定看護師の研修の質の向上を図る。

謝　辞

本教育課程での授業評価にご協力くださいました研修生の皆さまへ感謝を申し上げます。

引用文献

江見香月，宮本良子，上野優美．(2014)．認知症看護実践における看護師の困難さの変化について－認定看護師教育課程修了生の研修前と研修中の実践に焦点を当てて－，第15回日本赤十字看護学会学術集会講演集，102－103.

筑後幸惠，松村ちづか，星野純子．(2009)．緩和ケア認定看護師教育におけるポートフォリオ導入の効果．埼玉県立大学紀要，11，35－39.

パトリシア・A・クラントン，入江・豊田・三輪共訳．(2010)．おとなの学びを拓く－自己決定と意識変容をめざして，鳳書房．203.